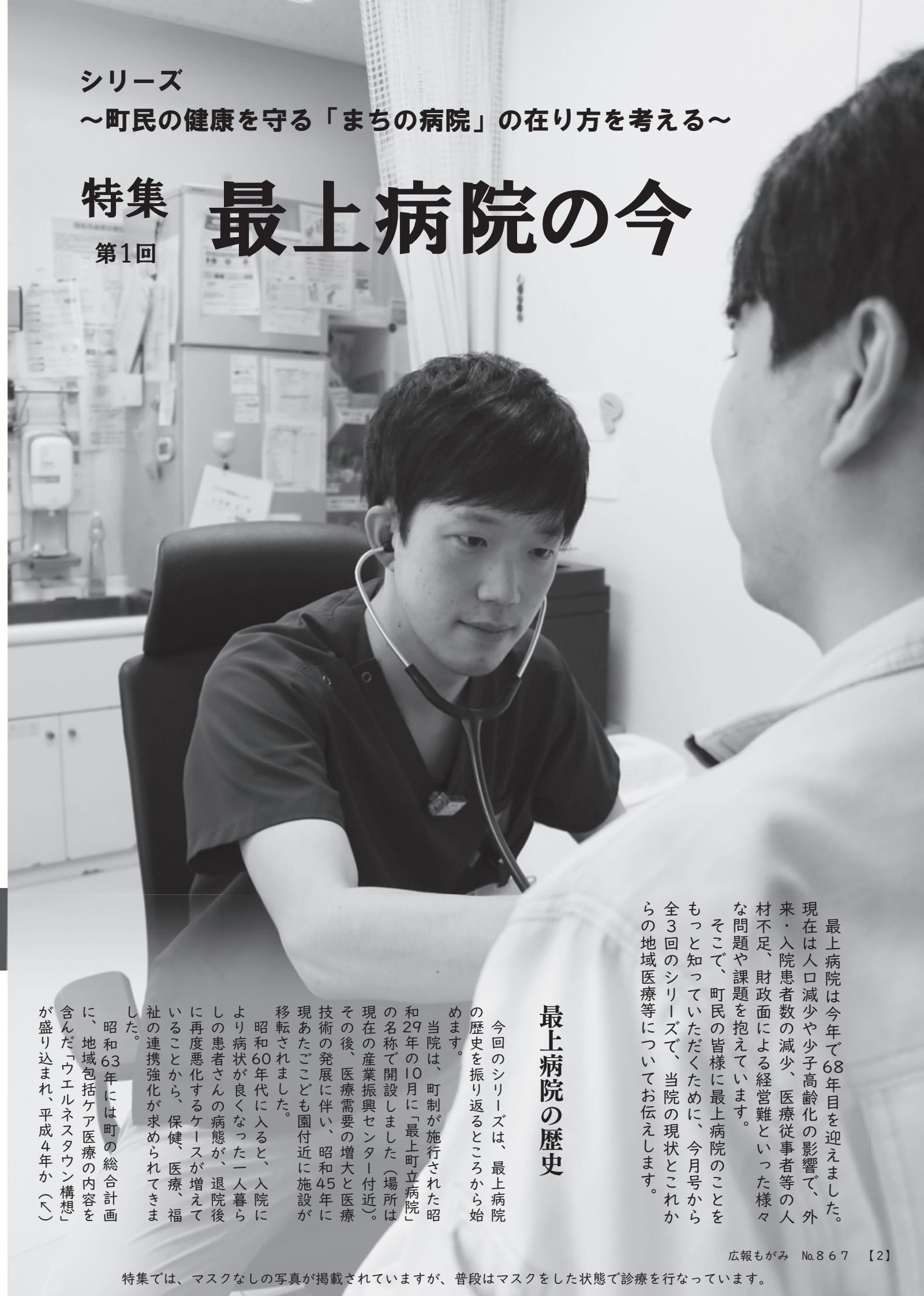


シリーズ ～町民の健康を守る「まちの病院」の在り方を考える～

特集 最上病院の今

第1回



機関との連携強化を図るなど、医療サービスの充実と効率化に努めています。

病院の利用状況は？

次に、最上病院の現状をご理解いただくために患者数の推移を説明します。

当院は、平成27年まで2病棟体制（一般病棟50床、療養病棟20床）を維持してきましたが、看護師不足により1病棟（一般病棟60床）へ統合し、病床の規模縮小を図りました。下記の表は、延入院外来患者の推移を表したものです。

入院患者数は平成27年にピークを迎え、延べ23,677人。これに対して令和4年では15,560人と約7,000人（34%）減少しました。入院医療に関しては、在宅復帰や転院といった兼ね合いもあり、判断が難しいこともありますが、患者数の減少は診療報酬の減額にもつながるため、経営面においては非常に苦しい状況だと言えます。

次に外来です。患者数のピークは平成25年の、延36,503人。それに対し、現在では25,801人と約10,000人を超える患者数が減少しています。年間の診療日数は約240日なので、ピーク時と比べると1日当たり約40

人の患者が最上病院に通院していないことになりました。

その原因は、人口減少や、町民の皆様が健康増進に努められたこと、他院への移動など一概には言えませんが、いずれにしても当院に受診する患者数は10年間で3割近く減少していることがわかりました。

こうした状況においても「最上病院」が必要とされている理由には、最上医療圏域における新庄市と最上町の距離が関係しているのではないかと推測されます。

最上病院は今年で68年目を迎えました。現在は人口減少や少子高齢化の影響で、外来・入院患者数の減少、医療従事者等の人材不足、財政面による経営難といった様々な問題や課題を抱えています。そこで、町民の皆様用最上病院のことをもっと知っていただくために、今月号から全3回のシリーズで、当院の現状とこれからの地域医療等についてお伝えします。

最上病院の歴史

今回のシリーズは、最上病院の歴史を振り返るところから始めます。

当院は、町制が施行された昭和29年の10月に「最上町立病院」の名称で開設しました（場所は現在の産業振興センター付近）。その後、医療需要の増大と医療技術の発展に伴い、昭和45年に現あたごこども園付近に施設が移転されました。

昭和60年代に入ると、入院により病状が良くなった一人暮らしの患者さんの病態が、退院後に再度悪化するケースが増えていくことから、保健、医療、福祉の連携強化が求められてきました。

昭和63年には町の総合計画に、地域包括ケア医療の内容を含んだ「ウエルネスタウン構想」が盛り込まれ、平成4年（'16）

令和

和2年から急に感染が広がった新型コロナウイルスは、当院にとって体制や患者様への対応を、大きく変えざるを得ない出来事となりました。同年4月頃では、「未知のウイルス」ということで国民全体が外出制限を行なうことになり、当町においても例外ではありませんでした。

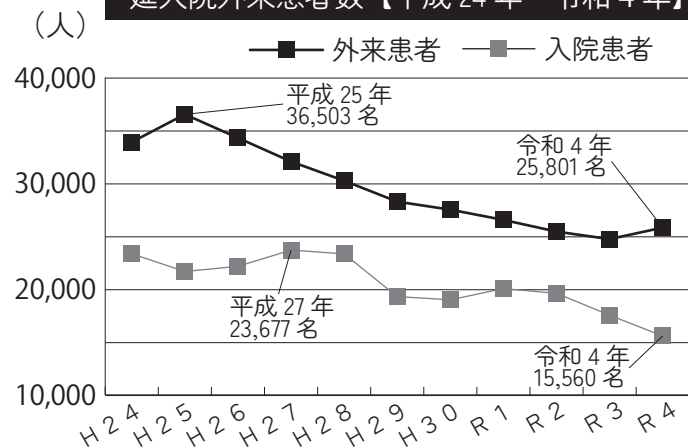
こうした状況の中、当院を受診したくても外出制限の為、来院することすらできない患者様が増えたため、電話再診を行ないました。また、病棟などでも面会制限実施に伴い、通信機器を使ったオンライン面会なども行ないました。

その後、同年10月頃に発熱外来を設置し、PCR検査体制の充実、また、健康福祉課と連携しワクチン接種等を行ない、町民の健康を守るため地域医療の役割を担ってきました。

現在では、面会制限が条件付きで無くなったものの、感染対策を継続しながら、これまで通りの診療を行なっています。

しかし、以前から課題とされていた「看護師不足」がコロナ禍を経て、さらに浮き彫りとなりました。退職の年齢を迎えたにもかかわらず、当院を支えるため働いてくれている職員が多い状況にあり、早急な改善が求められています。

延入院外来患者数【平成24年～令和4年】



コロナ禍が収束しつつある今、最上病院はどんな状況？